

COOP-JOSO News Letter

2019年5月5回号 発行/常総生協広報G

2019年度活動テーマ(案)「JOSO食材でかんたん・うちごはん」

常総生協「つながろうふくしま2019」

福島スタディーツアー報告

4月13日(土)、さくら満開の福島浜通りを北上し、相馬の生産者さん訪問をしてきました。

原発事故から8年がたちました。この間、常総生協では生活スタイルを見直し、原発を止める運動を続け、被災地とともに歩む取り組みを続けてきました。



しかしながら、現地への関心も薄れてきているのも事実です。原発事故によって地域が破壊されるとはどういうことなのか、語り継いでいかななくてはと考えております。今回は帰還困難地域周辺の状況をみながら、津波被災地の復興状況も確認し、その原発事故と津波被災の二重苦に向き合ってきた相馬の海苔漁師 久田さんを訪ねました。

2019年5月の予定

○生協基幹運営/地域活動・催し●

5月ゴンタの丘「常総っ子応援団」は毎週木曜日に活動しています。試食会は5月30日に行います。

5/16(木)和綿種まき(どんぐりてい/生協本部)
5/18(土)めぐみちゃん田植え
5/18、19(土、日)つくばスローマーケット出店
5/25(土)竹村さんのいちご収穫体験
5/29(水)定例理事会

○提携・協同・連帯企画●

5/12(日)甲状腺検診@守谷(常総生協本部)
5/17(金)生協ネットワーク21商品担当者会議
5/24(金)茨城県生協連主催:子ども支援プロジェクト
キックオフイベント
5/26(日)わんぱく・じょうそう合同会社 役員会

朝7:30に守谷生協本部を車二台で出発。富岡町の夜ノ森地区の桜並木から視察スタートです。桜はきれいに咲き誇っていますが街には人は住んでいません。



車内には放射線を測定する計測器をおいてリアルタイムに測定をしながら進みます。線量がどんどん上がり、一番のピークは福島第一原発そばの国道六号線走行中で、約4マイクロシーベルト毎時でした。守谷の100倍の値です。

そのあと、福島第一原発の北、5 kmにある浪江町請戸地区に向かいます。津波で多くの被害をうけたところです。浪江町などでは放射能に汚染されたがれきは域外にもちだすことはできず、域内に作られた専用の焼却施設で処理されたり、保管場所に一時保管されています。津波被害を受けた請戸小学校、あらたに作り直されている請戸港を見学し、そのあとは相馬の「報徳庵」へ。



↑津波被害をうけた浪江町請戸小学校 震災遺構として残すか検討されている状況です。

ここは、震災直後、被災をされた水産加工業者や漁師のみなさんが始めた「相馬はらがま朝市クラブ」が運営する食事処&サロンです。津波被災を受けた相馬のみなさんが避難をしていた相馬のスポーツアリーナの敷地内で毎土日朝市を開催。全国の支援団体と被災者をつなぐ重要な役目を担っていました。常総生協も組合員のみなさんからの支援物資や新鮮なお野菜などを頻繁にお届けしていました。

この「報徳庵」でお昼ごはんをいただきました。相馬であがったカレーの煮付けや常総生協のカatalogにも頻繁に登場するセンシン食品(相馬

/名取) のめひかり、タラのフライなど、大変おいしいご飯を頂きました。

そのあと、海苔漁師の久田さんのところへ。久田さんはセンシン食品の高橋社長の後輩で、常総生協が震災後の被災地支援先として高橋さんにご紹介していただいた経緯があります。具体的には常総生協から久田さんに海苔乾燥機の購入一部支援をさせていただきました。



↑相馬 海苔漁師 久田さんの作業場。奥の赤いジャケットを着ている方が久田さん。

今回、そんな乾燥機が稼動しているところを見学させていただき、実際の海(相馬 松川浦)でのひとえぐさという種類の青海苔の様子を見学させていただきました。

震災直後、津波で海苔の菌糸が流れてしまい養殖できないのではないのか、つなみで流された瓦礫で海がもとに戻るのであろうか、原発事故の放射能の影響で永遠に操業出来ないのではと海苔養殖の環境は先が見えない状況でありました。そんなお話をききながら、現在なんとか試験操業までたどり着き、青のりが出荷できているお話をお聞きしました。



この青のりはセンシン食品経由で常総生協の組合員さんも買うことができます。

津波被災地/原発被災地の困難さ、複雑さは現地に行くとうまくみえてきます。私たちが応援できることは、つながること、おいしい商品として買うことぐらいです。

ぜひ、みなさんもセンシン食品の商品を味わってみてください。(※全て放射能検査済みです。)

次回の青のりの企画は6月3回になります。

参加組合員の感想（内容を編集し抜粋しております。）

原発事故から8年もたっているのに自分たちの努力だけでは復興できない生産者の思いを再認識しました。青のり養殖漁師の久田さんの作るのりは品質が良いにもかかわらず、福島産ということだけで他県の加工業者に買ってこれないとのこと。何とも辛く切ない気持ちになりました。本当に大変なのに前向きに進んでいる久田さんの姿は背筋が伸びていて素敵でした。

久田さんの青のり。初めていただきました。おみそ汁にいたらあまり海草好きでない家族も「磯くさくなくておいしい」といっていました。海苔の佃煮も美味しかったです。

（取手市 Oさん）

車内で線量がどんどんあがっていきました。青のり養殖の久田さんもとても親切で質問にもたくさん答えて頂きました。子供も「意外と楽しかった」と言っていました。松川湾は景色もよくて気持ち良かったです。相馬の津波被害の伝承祈願館でビデオ上映や見つかったアルバムなどを見たことで津波被害について子どもにも感じるころがあったようです。どの辺を通ったとか、どのあたりを見学したのか地図があると良かったです。このようなツアーをやっていただけて本当にありがとうございました。

（柏市 Tさん）

常磐道を北上し、帰還困難地域の高放射線量地域も車では通過ができ、途中、富岡町の夜ノ森、浪江町の請戸港を見学、相馬市のNPO相馬はらがま朝市クラブが運営する仮設店舗の一角にある「報徳庵」で昼食、これが飛びつきりおいしい地場の魚を使った煮付けにてんぶら、青のりの入った汁をいただきました。

松川浦で青のりを養殖している久田さんのお宅では青のりの乾燥場を見せていただきました。久田さんの丁寧な説明と松川浦の網場も案内され、おいしい青のりが生産される状況を知ることができました。福島沖の漁業は、まだ試験操業で漁業者、加工業者も立ちいかない状況で、現在、加工業の保障はされていないとのこと。被災地の土地は、農産物は見当たらず、黒いフレコンや太陽光パネルの多さに驚きました。崩れかけた家屋の多く見受けられ、復興はきびしい状況にあることを実感しました。

（つくばみらい市 Hさん）

3.11以来、TVの画像、新聞、雑誌からの情報を得たので、ぜひ自分の目で福島現場を見たいと思っていました。8年も経過して長すぎる時間が過ぎてしまった感があります。ほんの一部ですが6号線沿いの津波の痕跡を見ることができました。鉄筋の建物のみが点在する場所では小学校の児童の姿かつての街並みを想像するしかありませ

ん。復興して可動している漁港や建築途中の漁港も人影が少ないのが印象的です。のり漁師の久田さんの人柄に打たれました。がれきの中によくのりの芽が残っていてくれたものです。工場、海苔の現場を見学し、大変なお仕事と感じ入った次第です。

（つくばみらい市 Sさん）

車の中で放射線量の数値に驚きながら、相馬へと行きましたが見渡す限りの風景はシーンと静まったまま。海岸辺りはきれいになり公園風に整えられていました。相馬松川浦の久田さん訪問では青のりを育てている海へと案内をして下さり、大変な努力のいる仕事を知ることが出来ました。海の再生は大変なことでしょうが久田さんのがんばりに感動し、みんなでつながりつづけなければと思って帰ってきました。それにしても本当に大変な8年間だったでしょう。「原発いらない！」「必要なし」のおもいを強くしました。久田さんのつくだにのり、青のり very goodですよ。

（守谷市 Mさん）

報道からだけでは識ることの出来ない現状の一端をみる事が出来、政府が声高に叫ぶ復興はモニタリング作りすぎず、今も苦悩する被災された方々の気持ちによりそう施策がなぜできないのでしょうか。人々の生活の気配のない街や浜、ちょうど季節もよく桜が美しく例年花見を楽しんでいらした方を思うと言葉を失います。手を抜かない常総生協とその職員さんの努力はすごいと思いました。有意義な訪問に同行でき感激しています。

（取手市 Nさん）

テレビで何度見た光景ですが、満開の桜のまわりでみる金属扉で閉鎖された家・・・胸が詰まります。つくばに帰ってきての驚きの光景は照明で明るい町、車の多さです。1日中みた光景との差に少々戸惑いました。この町で避難指示が出たらと思うとゾッとしました。

（常総市 Tさん）

事故後、初めて行きました。壊れた建物、立派なのに住んでいない家を見て現実なんだと実感しました。高い数値（放射線量）の中で生活している人がいるんだと複雑な気持ちになりました。

（住まない選択を選ぶ権利がないなんて本当に腹が立つと思いました。）のり頂いて帰りました。これは数値どのくらいあるのだろうと思いました。機会があったら生協で測りたいです。（※カタログ掲載時に測定済みです。不検出でした。海苔の出荷組合でも検査をして出荷しています。職員記入）

（牛久市 Nさん）

10年未満の職員を対象に、生協とは？協同組合とは？を学ぶきっかけとして昨年の9月から約半年間学習会を開催してきました。実施してきた職員のレポート第2弾（ラスト）になります。

※2019年5月3回号で第1弾報告を掲載しています。

最初勉強会と聞いたとき、入協3年位にの新人を集めて常総生協の商品を勉強するのかな？と思ったら全く違う内容で、生協運動や生協の歴史を一楽照雄著の「暗夜に種を撒くごとく」を読み進めていく事でした。

最初はロッチセールや賀川豊彦など生協運動において重要な点が出てきたのですが、ところどころで一楽思想が入ってきて結果的には複雑な内容だなと思いました。今後も時間があるときに読み進めていきたいと思います。

半年間の勉強会を通して自分が一番印象に残っているのは、商品部の柿崎さんが講師となりリン酸塩の講習会を職員向けにしてくれたことでした。魚のすり身一つでも添加物が入ると膨張して大きく見えるが、魚本来の味が無い。大量生産するのにあたって、魚のすり身の含有量を抑え、コスト減をしながら安価な価格で販売している事が分かりました。

対して生協の練り物はリン酸塩の使用が無いため、魚のすり身の含有量が違い、魚本来の味を感じることが出来る。まっとうに作っているため、モノづくりの背景も含めると、適正な価格で提供していることが理解できました。

添加物の怖さを改めて知ってのと同時に実践で感じる事が出来たのでとても印象に残りました。

夜の19-20時の限られた時間の中での生活協同組合の原理を再認識できたので良かったと思います。次回はキャリア問わず、常総生協のの商品の講義を開催して学んでいきたいと思っています。

(供給部 小室)

私は「一楽照雄」という人物を全く知らなかった。勉強会の音読を通して一楽の思想、理論、実践の全体像が本書（暗夜に種を撒くごとく）をすべて読み切っていないが、少しは理解できた。協同組合の難題に真正面から取り組み、また有機農業とは技術的様式の問題ではなく生活上の価値の問題である、と説いたのが素晴らしい功績であり、今あるのだと思います。

本書の中で特に印象に残っているの項目が2か所あります。

- P82~83 〈基本としての協同組合〉
協同組合の協同の思想・協同の考え方を私なりに理解できた。

- P242~244 〈「協同組合論」の再生を願う〉
農協・漁協・生協とかの言葉だけが用いられて「協同組合」という言葉がめったに用いられない状況であり、また協同組合の経営の観念を知ることが出来、なおかつ協同組合の目的を知ることが出来た。

最後に、金曜日の夜に1週間の疲れがある中、商品部、供給部の皆さんと貴重な時間を共有できたこと、大石さんの知識豊富なお話を聞いたことにとっても有意義であった。

時間を作ってとても難しい本書を読み返して、金曜日学習会での思い出しながら、少しでもより理解できればと思います。

(供給部 渡邊)

半年間学習会を開いていただき、ありがとうございました。半年に渡り協同組合の祖・一楽照雄氏の著書「暗夜に種を撒くごとく」を250ページ近く読むことができました。文章の内容は難しく、自分の中に落とし込むのは困難でしたが、最も印象に残ったのは「経営危機打開の道は、経営技術の問題のなかにあるのではなく、運動組織としての運営の民主化の徹底ということにしか求めることはできない。これだけが唯一の道です。それは実に面倒な事であるが、考えてみれば、これほど責任の軽い気楽なものではないのです」という点です。

一般企業は経営危機に瀕した際、事業撤退・統合、コストカットなど自社を中心に考えがちです。しかし、この「民主化の徹底」という観点こそ協同組合なのだと思いました。著書には「民主化の徹底により、過去いくつもの単協が再生した」と続きがあり、今私たちが直面している問題の解決の糸口になると感じています。

相違点とすれば、この著書を書いた時代(今から30年以上前)と現代は、IT普及による情報量、食の考え方、働く環境、世代の価値観など、外部環境が目まぐるしく変化しています。変化を続けるなかで、協同組合として組合員・生産者・生協の三者がどう気持ちを寄せ集め存続していくか、考えて実行していきたいと思っています。

(商品部 小宮山)